

マタイによる福音書 5:1~12

夏目漱石門下の一人である寺田寅彦のがかつて語ったことが「災害は忘れた頃にやってくる」というこの有名な一言でありました。しかし、昨今の現状を思いますと、災害は忘れたどころではありません。私たちの足下に置かれているものであり、それゆえ、極限状況はいつ訪れたとしても不思議ではありません。そして、そこで、期せずして現れるものがその人となりというものでもあります。つまり、人としての本質的な部分が現れ出てくるということです。ですから、人が災害を恐れるのは、単に生命財産が脅かされるだけでなく、普段隠されているものを目の当たりにすることになるからなのかもしれません。そして、そこで現される本質的なものとは、何もない、何一つできない、といったないない尽くしの自分です。ですから、私がこうして皆さんを前にお話しできるのは、ある一線を越えてはいないからでもあります。ちなみに、向こうとこっちとを分ける線とはどれくらいのものなのでしょう。それは本当に僅かです。鼻と口との間くらいのものだと思うのです。なぜなら、口まで水につかっても、鼻が水につかなければ、なんとか息をすることはできますが、鼻まで水につかっただけでももうダメだからです。ですから、私がこうして皆さんの前にいるのは本当にたまたまのことだと思うのです。ところで、この「たまたま」ということでありますが、ルツ記ではボアズとルツの出会いを「たまたま」だったと語るように、このたまたまの中に現されているものが神様の御心でもあるのです。ただ、もちろん、何でもかんでも神様の御心に結びつけていいわけではないのですが、けれども、私たちがこうして出会い、信仰生活を共にしているのは、やはりそういう意味での神様のたまたまであるのは間違い

ありません。そして、それは、今日の御言葉に即して言えば、ここでイエス様の前にいる弟子たち、群衆も、そういう意味でたまたま御心によってイエス様と出会った人々であったということです。

そこで、早速、御言葉に聞いて行こうと思いますが、このマタイの五章から七章にかけての御言葉は、いわゆる山上の説教、山上の垂訓と呼ばれているものです。そして、それについては皆さんもよくご存じのところでもあります。それは、山上の説教を通し、私たちは日頃からあれこれと深く考えさせられることが多いからです。ただし、その場合の多くは、私たちの多くにとっては必ずしも喜ばしいばかりではありません。ですからそういう意味では、私たちにとっての山上の説教は、喉の奥に引っ掛かった魚の骨のようなものなのかもしれません。それゆえ、ある伝道者は、その受け止め方にその人の信仰の姿勢がよく現れると言うのです。ただ、それにしても、私たちが山上の説教を通して語られるイエス様のその意にお応えできないのはどうしてなのでしょう。それは、近くにいますイエス様を遠くに感じるから、つまり、イエス様と一緒にいたいと強く思いながらも、イエス様のことを別世界の方であると思っているから、ですから、それだけにまた、このイエス様の言葉が誰に向かってどのように語られているかが重要な問題になってくるわけです。そこで、先ず、この「誰に」というところを御言葉に聞いてみますと御言葉にはこうあります。

「イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄ってきた」と、このように御言葉はそのときの状況を語るのですが、ところで、山の上にイエス様と一緒にいるのは一体誰なのでしょう。弟子たちだけ

なののでしょうか。それとも、弟子たちと群衆なののでしょうか。群衆を見て、とあるところは、群衆を見てその人たちを引き連れて、とも理解できますし、また、群衆を見て、弟子たちだけを引き連れてと、どちらにも解釈できるのです。このことはつまり、イエス様が語った相手とは、ある特別な人たちだけなのか、それとも、弟子たちを含めた自分の後に従った大勢の一般の人たちなのか、そのどちらかははっきりしないということです。けれども、判然としないことを理由に、だからどっちでもいいということにはなりません。なぜなら、イエス様との特別な関わりの上に成り立っているものが私たちの信仰でもあるからです。それゆえ、どっちでもいいということにはなりませんし、もし、それでいいということになれば、イエス様との特別な関係は特別なものではなく、一般的で曖昧模糊としたものになってしまいます。それこそ、私たちが特別だ特別だといくら口を尖らせて言ったところで、それはあなただけが言っていることでは、とそう人からいわれかねないことにもなってしまいます。ただ、もちろん、そうではない、イエス様と私たちの関わりはやはり特別なものであり、まただから、この私たちとイエス様との関係性のその特別さを語るために、御言葉は結婚に喩えて説明するのです。

そこで、キリスト教式の結婚式を思い出していただきたいのですが、花嫁花婿が会衆の前に立ち、夫婦となることを神と会衆の前で誓うのですが、このことはつまり、神のお側近くには、夫婦となることを誓う者と、それを見守る人々がいるということです。そして、この神様の一番近くにいるがイエス様であり、キリストの花嫁である私たちなのです。ただ、教会の結婚式では、会衆はただの傍観者ではありません。夫婦とされた二人が神様に誓約するだけでなく、その結婚については、会衆もまた神様の前で誓約が求められるのです。ですから、そういう意味では会衆も神様に近いわけです。

が、それゆえ、そこでもし会衆がこの結婚には自分は関係ない、責任はない、本人同士の自己責任であると、そう考えたとしたら、それは、キリスト教的なあり方からはほど遠いものとなってしまいます。腰が定まらないそうした姿勢は、花嫁を見捨てるだけでなく、その花婿であるキリストをも見捨てることにもなるからです。まただから、先ほど触れたある伝道者は、山上の説教の受け止め方を通して、その人の信仰がよく現されると言っているわけですが、それは、そこで現される信仰が痛みもなければ、苦しきもないものだからです。ですから、それに合わせて、その伝道者は、あるのは御言葉に対する言い訳と誤魔化しでしかない、そのようにも言っているのですが、ただ、そうした誤魔化しは群衆に限ったことではありません。特別な関わりの中に置かれている私たちの中にも十分に認められることであり、ですから、私たちがイエス様の意に反するように山上の説教を聞いてしまうのはそれゆえのことでもあるのでしょうか。従って、そう考えれば、イエス様がこれから何を語ろうとしているかの意味が分かります。それは、どっちがどうだということではないということです。どちらに対しても一つの厳しさを求めておられるのがイエス様であり、従って、私たちがイエス様との特別な関わりの中にあることを自認するならば、なおのこと、私たちはこの厳しさをきちんと受け止めなければならないのです。

そこで、この「幸いなるかな」で始まる最初のところでイエス様は何を仰ろうとしているのか、それが「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである」というこの御言葉です。このことはつまり、イエス様と共に神様の御前にこうして私たちが立つとき、御言葉を通し何が起きているのかと言えば、それは、特別な関わりの中にある者も、そうでない者も、同じように神様の御前にあってイエス様と共に丸裸にされているということです。しかも、

イエス様はそれを幸せだと言っているのです。ただし、イエス様がそのように私たちに語るのは、罪人である私たちが御言葉によってこぎれいに、こぎつぱりされたからではありません。罪人であるそのままを誰もない私たち自身に明らかにし、また詳らかにするのがイエス様であり、ですから、これは当然のことではありますが、そこで少なくとも私たちは、それでいい、そのままでもいいと思うことはありません。イエス様を前にしてとつても恥ずかしいからです。また、だから、苦しいし、辛いし、痛いのです。そういう自分自身が悲しくもあるのです。ですから、それを突き詰めれば、私たちは生きることすらできなくなってしまうのでしょうか。そして、そう思った一人が、宗教改革者ルターでありました。そして、そこでルターが辿り着いた一つの答えが信仰によって救われるという、この信仰のみ、ということでもあります。それゆえ、このルターと同じ信仰の系譜に生きる私たちにとって、信仰とは決して曖昧模糊とした罪深い自分自身を誤魔化すためのものではありません。ルターが死の直前に「我々は乞食だ。それが本当だ」と、こう書き残したと言われているように、この歴史にその名を残したような偉大なる宗教者をしてこう言わしめるほどのものが私たちの信仰でもあるのです。

それゆえ、ルターのこの潔さに感動する者も多くいるのですが、ただし、私たちがイエス様の意に反して山上の説教を理解するのと同じように、そうしたルター理解には誤解があるようにも思うのです。それは、自分ができるできない、するしない、したいしたくない、この自分が、自分がというところからしか物事が見えていないからでもあります。従って、信仰の誤魔化しと神様への言い訳の理由はそれゆえのことでもあるでしょう。ただし、それは、私たちが神様に対し不誠実であるからではありません。むしろその逆です。イエス様と共にあることがよく分かっているから、一緒にいた

いと思うから、だから、これは、皮肉な話ではありますが、イエス様のことを見ているから、だからこそ、もっともっと、さらにさらに、とそう思い、一生懸命に頑張ってしまうわけです。けれども、頑張っても頑張っても、頑張れば頑張るほど報われない、そういうことが現にあって、するとどうということになるのか。イエス様が遠ざかっていく、イエス様といくら叫んでもイエス様はこっちをふりむてもくださらない、私たちはそんなふうになってしまうのです。そして、その理由は、自分が考えているように、自分が思うように、物事が動いていかなからです。そして、そのことを誰もない私たち自身もよく分かっている、だから、私たちはそんな自分を守るために誤魔化すしかない、言い訳をするしかないのです。ですから、そう考えるなら、言い訳も誤魔化しも、そういう自分のことを隠すためであり、「みんながそうである」ということです。従って、私たちの誰もがイエス様の意に反することを誰に対しても責めることができないのはそのためです。ところが、そういう私たちのことを常に丸裸にするのがイエス様であり、聖書の御言葉であるのです。

ですから、そういう意味では、イエス様も御言葉も私たちにとっては非常にありがたい迷惑なものだとも言えるのですが、しかし、このありがたい迷惑なものを信仰を持って受け入れているのが私たちでもあるのです。そして、イエス様と共に神様との関わりに招き入れられた私たちにとって、それが生きることであり、生きているということでもあるのですが、それゆえ、私たちは、御言葉に聞きつつ、神様とイエス様とのこの特別な関わりを日頃の生活の中で現していかなければならないわけです。ですから、そこで私たちに求められることは、当然、どっちでもいいということにはなりません。何でもありということにはならないのです。そして、そもその所で、私たち自身もそういうふうにとっちでもいいなどとは考えてはおりません。ところ

が、そう考えてはいないにもかかわらず、私たちの普段の暮らしぶりを見ると、それはどんなものなのでしょう。こうして社会生活を過ごす上で、教会と家庭、教会と会社、教会と学校、地域社会と、物事を分けて考えてしまうところが私たちにはあります。それどころか、教会の中でもどっちがどっちなんだか分からない状況が生じてしまうこともあるわけです。そして、それは社会に対してもそうです。私たちが御言葉に自分の気持ちや意見を代弁させ、いろいろと語ることがあるのはそのためでもあります。ですから、時に御言葉が世間から創作物と揶揄されることがあるのはそのためです。まただから、世の中からの批判を恐れ、はっきりとものを言わないことにもなる。それは、いずれにせよ、神様と社会との間に立つ自分自身に自信が持てずにいるからでもあります。また、その反対に私たちが時に開き直ったりするのはそのためです。けれども、山上の説教の中でイエス様が仰っていることは、私たちにできもしないこと押しつけるためなのでしょう。

信仰とは、イエス様の前で格好いい自分を見せることではありません。つまり、何かできる自分、何かも持っている自分、そういう誇らしい自分をイエス様に見ていただいて、喜んでいただくことを、御言葉はそれを信仰とは呼んでいないのです。これまで申しましたように、イエス様を前にして自慢できることなど何もない、何も持っていないし、誇ることなど何もない、それが私たちであり、だから、ルターは、死に際に、「我々は乞食だ、それは本当だ」と言ったわけです。けれども、それは、神様への恨み辛みをそのような形で吐き出したわけではありません。逆なのです。何ら功しのない私たちでありながら、いや、功しのないものだからこそ、その私たちに向かって、イエス様は「幸いである」と仰っているのです。しかも、天の国は、その私たちのためであるともイエス様は仰るのです。ですから、このルターの言葉は多

分に逆説的であるために人に誤解を与えてしまうのかもしれませんが、けれども、それは、本当にイエス様の赦しの中に身を置いている者の言葉以外の何ものでもなく、そして、ルターと同じようにそれを言葉にできるのが私たち信仰者、クリスチャンと呼ばれている者なのです。

従って、山上の説教を理解する上でのすべての前提はこのイエス様の赦しの中に私たち自身が置かれているということです。そして、それがイエス様が私たちと共にあるということです。それゆえ、4節以下にあるこの最初の部分で語られていることは、この、先ずもって語られている前提抜きに理解することなどできません。一つ一つを切り離し、バラバラに理解しようとするのではなく、主にあって、というここから聞いていくべきものであり、ですから、山上の説教の冒頭部分は、いわゆる、一つ、なになに、一つ、なになに、といった、社訓や家訓のような一つ書きに過ぎないものではありません。そういう、ある集団、共同体への帰属意識を高めるためだけに語られているのではなく、私たちの置かれた現実そのものを語るイエス様の言葉であるのです。ですから、そう意味で、山上の説教の中で語られていることは、私たちがそうならんとすることでもなければ、そうなりたいと願うものでもないのです。イエス様と共にある日々を過ごす中で、自ずとそうされていくもの、それはちょうど幼子が日々少しずつ成長を重ねていくように、神様とイエス様からの恵みを受け、私たちが日々過ごすものであれば、気がついたらそうなっている、そういうものであるということです。ですから、急ぐ必要はありません。焦る必要もないのです。まただから、諦め、投げ出してはならないのです。なぜなら、私たちのことを一塊のものとして天の御国まで導いてくださっているのが共にあるイエス様であるからです。祈りましょう。